

目次 ■「大きく変容しつつあるキューバの暮らし」藤井満…2 ■白根全の「キューバの呪い」④…4 ■キューバ音楽の魅力に酔う
9・9キューバ友好フォーラムに50人…5 ■松尾光の「キューバ右往左往」④…6

2018 キューバ友好フォーラム

1月13日(土) 13:15~16:15 開場 13:00

5人それぞれのキューバ

参加費 1000円(会員 500円)★事前申し込みは必要ありません

会場 **日本記者クラブ大会議室** TEL 03-3503-2721 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル9階
最寄り駅は東京メトロ千代田線・日比谷線霞ヶ関駅、東京メトロ丸ノ内線霞ヶ関駅、都営三田線内幸町駅、JR新橋駅日比谷口



キューバの民宿めぐり 藤井 満さん ジャーナリスト

大学生だった1988年から89年にかけて中米のニカラグアやエルサルバドルを中心に旅行。新聞記者になって中南米から縁遠くなっていったが、2017年春から1年休職し、再び中米諸国を訪ねた。変容する前のキューバを見ておきたいので、10月18日から11月29日にかけて10都市を訪問した。

(次ページのレポート参照)

キューバツアー参加者の報告 2017年10月5日~17日

防災もキューバから学ぼう!! 正谷絵美さん

防災士。北京在住時に四川大地震があり、北京まで揺れたことに衝撃を受ける。自分に何か出来ることは……と考えるようになり、防災の世界に興味を持つようになる。仕事の合間を縫って、防災士として全国で防災啓発活動を行なっている。中国で国連開発計画と中国政府が進める防災計画会議に参加。シングル、4児(18、9、5、3歳)の母。介護2名を抱え、家族のこと、仕事で飛び回る毎日。

感動!! キューバ縦断の旅 横山真理さん

1953年、広島生まれ。東京都の中学校教員として38年間勤務。30代よりゲバラ、フィデル、キューバの教育に心惹かれる。アレイダ・ゲバラさんの講演を聞き感動。この頃からキューバ円卓会議のサルーを読み始める。2016年、2017年とキューバへの旅

見て、体験もしたキューバ医療 安田 清さん

1944年生まれ。静岡県の掛川東病院勤務 医師 専門は整形外科、災害医療。キューバへのツアーは今回で4回目。「キューバと日本の医療制度を対比させることで、日本の医療を改善できないか」という大きな目標への小さな希望をもってキューバへ。

キューバ右往左往・番外編 松尾 光さん 本紙「キューバ右往左往」の著者(※6~8ページ参照)

日本経済新聞社でIT技術者として30年近く勤務。2016年3月に退社後、仕事とは無縁なキューバ行きを決めた。その経緯は、今から25年前に父親の松尾威哉さんがイバナ大学に日本語講座を開設したことにさかのぼる。



正谷絵美さん



横山真理さん



安田 清さん



松尾 光さん

大きく変容しつつある キューバの暮らし

藤井 満 ジャーナリスト (1ページ参照)

民宿

ハバナの旧市街は何度も映画で見ていた。崩れそうな家々にボロぞうきんのような洗濯物がたなびき、人々は底抜けに明るくて……という先入観があった。

ところが実際に訪れると、周辺には崩れかけの家が多いが、中心街はコロニアル時代のテーマパークのように整備され、カフェや民芸品の店が軒を連ねている。ビエッハ広場で生ビールを飲んだら1杯600円。日本のビアガーデンと変わらない。ハバナは観光が発展しすぎて庶民の生活がいつこうに見えてこない。翌日には、世界遺産のまちトリニダに脱出することにした。

外国人向けの高級バス・ビアスールで6時間ほど。トリニダのターミナルに降りると、民宿(カサ・パルティクラール)の客引きに囲まれた。「1泊1700円」という黒人のおばさんアリシアについていった。

外国人向けの民宿の入口には青いイカリのマークが掲げてある。3階建て民家の3階部分の独立した部屋には、シャワーもトイレもエアコンも完備されている。「夕食は1100円でランゴスターを出すよ」という。巨大なイセエビが出てきて腹いっぱいになった。

世界遺産に認定されている石畳のまちは落ちついていて観光客が多い。カフェやレストランが多くて、旅行者には快適だ。

でも5分も歩くと、ふつうの住宅街になる。悲惨な物乞いはいないのだけど、大人も子どもも「ボールペンをちょうだい。ここには売ってないんだ」と言ってくる。たしかに、文具や洋服、トイレトーパーを売る店を見かけない。「配給のマッチを使い切っちゃって、コーヒーもわかせない」という人や、トイレトーパーを田舎の町で大量に買い込む人もいた。日用品の不足は深刻なようだ。

次のカマグエイ市では、アリシアの友達ユーユ(36歳)の家に泊まった。中心街の家で、ホテルのような狭い部屋だがシャワーやトイレ、エアコンは付いている(1泊2200円)。

ユーユは銀行員で、夫は電化製品の技術者だった。家の裏に菓子工房も営んでいた。2年前に菓子工房の建物を売って民宿をはじめた。

ソ連崩壊のあおりで石油供給が途絶して経済が崩壊した1990年代前半は「ペリオド・エスペシャル」と呼ばれる。このころ、1日16時間は停電で、冷蔵庫を使えないから食料も備蓄できなかった。配給も減らされ、コメは週末しか食べられず、ふだんは豆と小麦粉だけを口

にしていた。

「あのころは石油ランプの生活だった」と、すすけたランプをみせてくれた。94年ごろから米国からの送金が届くようになって落ちついてきた。民宿のおかげで生活は安定したという。

カマグエイの次に訪ねたサンティアゴ・デ・キューバでお世話になった民宿は、

ソファーセットと冷蔵庫のある応接室と台所も備えていた。それで1泊2200円。経営者のカルロス(63)は昨年まで大学の化学教授で、月給3800円だった。定年を待たずに退職した。友人の医師は月給4900円だったが、民宿をはじめた。

医師はキューバでも高収入だとされてきた。とくに2年間海外に赴任すると、通常の給与のほかに預金が積み立てられる。医療機器の技術者としてベネズエラに滞在した男性は月1万円が積み立てられ、それで中古車を買ってタクシーをはじめた。ただし、任期を全うせず帰国したり、逃亡した場合は、積立金は没収される。

サンティアゴで会ったタクシー運転手(48歳)の妻は医師で、アフリカで2年間、ハイチ地震の現場で半年間働いた。政府から中古車を44万円で購入する権利を与えられた。その車で、夫がタクシー運転手をしている。

「アフリカもハイチも、強盗や暴力が多くて大変だったらしい。でもキューバの医師は、エボラ熱があるところだろうとどこだろうと、人々を助けに行くんだ」と妻の仕事を誇る。「ふつうに車を買おうとしたら中古のロシア車だって170万円もする。生活できているのは妻のおかげだよ」

経済危機の時代を経て、外貨獲得の手段として、政府が観光振興に力を入れ、民宿が一気に増えた。だが最近では競争激化で、経営が困難な民宿もではじめた。

西部の観光地ビニャレスではこの4、5年で、まちの中心部の大半の家が民宿になった。民宿をするには1部屋あたり1カ月3800円と、売り上げの1割を政府に納めなければならない。「あなたが来るまで2カ月間、客が一人もいないのに、2部屋で1万5000円も取られた」



サンティアゴ・デ・キューバの民宿
この部屋のほか、寝室と台所がある



サンティアゴの「トロローハの家」

「トランプ政権になって、米国の旅行者がまたいなくなっちゃった」といった悲鳴をあちこちで聞いた。

タクシー運転手

民宿と同様、収入を求めるインテリが多いのがタクシー運転手だ。

シエラマエストラ山脈にある、ゲリラ時代のカストロの秘密基地を訪ねる際に乗ったタクシーの運転手（43歳）は病理学の医師だった。1996年に就職したときの月給は1700円、2013年の退職時でも3000円だった。今は海外からの医療ツアーなどが増えたため、医師の給与は6000～9000円になっているという。

キューバでは医療は無料だが、物資不足は深刻だった。顕微鏡は1960年代のもので、刃物の研磨機やパラフィン紙も足りない。レントゲンのフィルムが欠乏することもあった。「人材は豊富だけど、物資がなくて検査が遅れることがしょっちゅうあった。給料も安いし、やってられないよ」。タクシー運転手になって生活が安定したという。

ハバナのクラシックカーのタクシーの運転手は建築技師だった。米国の親戚から金を借りて400万円で車を購入し、2年間で完済した。最低でも月20万円の収入があることになる。医者で月給の40倍だ。

飲食店にもインテリが少なくない。チェ・ゲバラの霊廟があるサンタクララの飲食店で出会ったリベット（26歳）という女の子は「ここにはチェのすべてが残ってるまちよ」と誇らしげに語った。大学で5年間心理学を学び、卒業後は4年間、心理療法士をしていた。「キューバは医療も教育も無料だし、だれもが専門家になれるんだけど、専門家になっても給料が少ないからそれを生かせない。それがこの国の矛盾よね」と言った。

客引きの30歳の兄ちゃんも建築学の大学院卒だ。「このへんのレストランは（大学出の）プロフェッショナルばかりだよ」と自嘲気味に語った。

キューバほど人材を無駄にしている国はないかもしれない。

災害と治安と

最東端にあるキューバ最古のまちバラコアは、昨年のハリケーンで壊滅的な打撃を受けた。海岸沿いを歩くと5階建てのコンクリートの集合住宅が廃墟と化している。強風と波が木材や岩石などをビルに打ち付け、崩壊させてしまったのだ。



ハリケーンで崩壊した集合住宅

台風というより津波のような破壊力だ。でもそのハリケーンでも人口9万人のバラコアの死者はゼロだった。

ハリケーンが接近すると、町内会（革命防衛委員会）が1軒1軒まわって屋上や庭にある危険なものを撤去させる。年寄りや病人は医師が常駐する避難所に移す。古い家屋の人たちも避難させる。

自転車タクシーの運転手（40歳）は20年前に2万円で買った古い木造の家に住んでい

た。付属の畑で野菜や果物をつくり、ニワトリやウサギも飼い、食べものはほとんど自給できるという。

ところが、昨年のハリケーン後に避難所からもどると、家は跡形もなくなっていた。政府が半額を援助して1年かけてコンクリートの家に建て替えた。

「キューバ人はハリケーンじゃ死なないよ。家はちやちだから消えちゃうけどな」

「日本では大雨で何十人も死ぬことがある」と言ったら、「津波はしかたないけど、大雨でも人が死ぬのか。まるでアメリカだな。かわいそうに」と妙な顔をした。

今年9月のハリケーン・イルマでは、全国で十人近い死者が出た。それについて聞くと、「言われたことをきちんとしない、規律がゆるい人たちが犠牲になったんだ」と言った。「規律」といえば、交通機関でも買い物でも、キューバ人が整然とならぶのに驚かされた。

まちも概して清潔だ。馬車が走り回り、犬は放し飼いだから、ウンコはあちこちに転がっているが、そのウンコの量が増えない。1日1度か2度、だれかが必ず掃除しているからだ。貧しい地区の川沿いは、ほかの中米諸国ならばゴミだめになりがちだが、キューバではそうならない。

町内会組織と警察の優秀さが、キューバの安全や治安や清潔感を保っている。ある意味、日本に似ている。でもそれは、政府に反対するメディアも団体もないキューバでは息苦しさにもつながる。「新聞は政府の言うことしか載せない。ちょっと前までは、こうやって外国人と話していたら、資本主義者と何を話してた！ って警察に捕まった。北朝鮮とたいしてかわらないよ」（小学校の校長）といった声はあちこちで聞いた。

キューバの理想主義は、平等に貧乏であることによって担保されていたように思える。観光振興による格差拡大で「古き良きキューバ」は大きく変容しつつあるのではないかと感じた。



家に招いてコーヒーを入れてくれたおばさん



漁師のおじさんがいきなりギターで歌い始めた

自根 金の キューバの呪い ④

持たざる者こそが 崇高な存在と化すのか



フィデルがもう少し演説下手だったら……

毎日必ずスコールに見舞われた。その日も午後早くから雲行きが怪しくなってきた。独裁と腐敗で名を馳せた元バチスタ大統領官邸、豪華な白大理石造りの革命博物館を一回りする。革命は博物館内に展示するもの、ということは、まだ現役で活躍している老革命戦士たちは動物園で展示せよ、という話にならないのだろうか。

革命博物館をはじめ、すべての博物館や美術館は入場無料。社会教育の一環ということだろう。チェの髭と髪の毛などというフェティッシュな遺物も並ぶ。旧式の重く無骨なマシンガンや弾痕の残る血染めの軍服よりも、絢爛豪華な建物の内装に視線が奪われる。館内を一回りし、奥に展示された「グランマ号」に足を延ばす。

メキシコのベラクルス近郊の港トウспанからフィデル率いる 7 月 26 日革命運動の闘士 82 人を乗せて、キューバ上陸侵攻を果たしたクルーザーだ。定員 12 名のおばあちゃん号は全長 13 メートル、思ったよりもずっと小さい。バチスタ政府軍の待ち伏せ攻撃をかいくぐって反攻拠点シエラ・マエストラにたどり着いたのも 12 名で、その中にはフィデルはもちろん、弟ラウルやチェ、カミーロ・シエンフエゴス、ファン・アルメイダら革命の立役者が揃っていた。かろうじて二桁のよれよれコマンドを前に、フィデルは「これで勝った！」と大喜びしたという神話が語り継がれてきた。

空調付きの巨大なガラスケースの中に鎮座する革命モニュメント、すなわち聖なるアイコン。そういえば、カトリックの伝統がほとんど途絶えたこの国では、フィデルも列聖されたサントか 12 使徒のひとりと同様に、本来であれ

ば大聖堂に鎮座していてもおかしくはない。生きて、動いて、革命を指導する聖人フィデル。これが、熱帯社会主義国キューバに君臨する権力の代理人としての正しい在り様なのだろうか。

やせっぽちのヒトラーは、絵描きになり損ねた陰惨で陰鬱な独裁者だった。彼にもう少し絵心があったならと夢想するのと同じように、髭のフィデルがもう少し演説下手だったら歴史はどのように展開したのか。立ちのぼる色気と品性に裏打ちされた野性味。なんという知的なドラマをキューバは演出したのか、思わずため息が漏れる。

雨が降り出した。大きな雨粒が路面から跳ね上がる。博物館の入り口わきのベンチに座ってスコールが通り過ぎるのを待つ。小学校高学年ぐらいの少年がずっと横に座った。無言でちらちらこちらをうかがっている。間を置いて、恥ずかしそうに話しかけてきた。

スペイン語話しますか？ どこから来たの？ 日本って中国のそばですね。ふーん、遠いんだ。当たり障りない質問を連発したあと、急に覚悟を決めたような厳しい顔つきを浮かべた。

「今日は僕の誕生日なんだ。あのさ、この靴見てよ。両側とも穴があいちゃってさ。もう、サイズも小さいんだけど、新しいの買ってもらえない。もうすぐ配給されるってママは言ってたけど、いつまでたっても靴は来ない。あのさ、その先のドルショップの左奥の棚に、すごくかっこいい靴が並んでるんだ。でも、僕は買えない。ドルなんか持ってないし、サイズはちょうどいいのがあるけど、でも僕は買えない……あのさ、……」

足元を見る。汚れたスニーカーというよりは、日本の小学生が履いている屋内履きのようなコッペパン型のボロ

靴。その先から親指がのぞいている。カリブ海のフランス領マルティニーク島を舞台に、島出身の女性監督ユーザン・パルシーの描いた泣かせる映画「マルティニークの少年」の主人公役の少年にそっくりな面立ち。くりくりした瞳とつやつやの顔。決して不幸そうには見えない。でも、靴の穴。そして誕生日。隣のベンチから大声が響いた。

「恥ずかしいことをするなっ！ お前の誕生日は年に何回あるんだ。この前も同じことを外国人に言っていたのを俺は聞いていたぞ。恥を知れ！」

白い制服の少年は雨の中を全力ダッシュで走り去る。怒鳴り声の主は貧相な初老の男だった。はき捨てるような口調で、少年の後ろ姿に向かって怒鳴る。その声に背中を押しやられるように、ますます速度が上がる。

「恥を知れ、このクソがきがっ！ 申し訳ありません。恥ずかしいことです。外国人にたかるなんて、以前は決してなかったことだ。恥ずかしい限りです」

こちらが叱られたような気になっていた。持てる者と持たない者はすなわち正義か悪か。持てる者は神か、あるいは持たざる者こそが崇高な存在と化すのか。いたたまれずに立ち去ろうとする私に、男の謝罪の声がまだ追ってくる。旅が出来る側と出来ない側、という旅先でいつも出くわす命題。答えがキューバにあるのだろうか。いつの間にか雨は上がり、黄金の西日が街路をさっと一筆ずつ塗っていく。

カリブ海取材初日のジャマイカ、リゾートホテルの真っ白なビーチの先は、ゴミの散らかる現地人御用達の海岸だった。豪華なホテルの外観を引き気味に撮影しようと柵を越え波打ち際を歩いていると、キューバのボロ靴少年と同じくらいの年代のガキどもに囲まれた。しつこくまとわりついて、露骨に金をせびってくる。が、その物言いと眼差しには強固なものがあって、貧困や飢えた胃袋は正義だという確信に満たされている。

持てるものから奪って生き延びる力、すなわち力学の法則。単純な話だ。別のカモを見つけて走り去るガキどもの後ろ姿に、昂ぶった肺腑から意図せぬまま安堵のため息が漏れる。否応なく旅は続いていく。

そうそう、ハバナのカーニバル情報も集めなくては。

(続く)

しらね ぜん

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネーターも担当。これまでに訪れた国は、6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。



11月13日にキューバ友好円卓会議からキューバ大使館あてに送付したメールです。

ベレイラ駐日キューバ大使殿

キューバ友好円卓会議

第64回国連総会で、貴国提案の「米国による対キューバ経済封鎖の解除を求める決議案」が、国連加盟国193国中191カ国の賛成で採択されたことを、心から祝福します。

また、11月8日に発表されたトランプ政権による経済封鎖強化と米国市民に対するキューバへの渡航制限強化に強く反対します。

キューバ音楽の魅力に酔う

9・9キューバ友好フォーラムに50人



高橋研二さんと竹村淳さん

キューバ友好円卓会議は9月9日（土）午後、東京・内幸町の日本プレスセンター内、日本記者クラブ大会議室で、2017キューバ友好フォーラム「魅惑のキューバ音楽を満喫しよう」を開催しました。

キューバ友好円卓会議がキューバの音楽を取り上げたのは、2004年のキューバ友好フォーラム「有機農業・医療・教育で世界のトップを行くカリブの奇跡キューバ」、2013年のキューバ友好フォーラム「いま改めて語ろう、キューバの魅力」以来でした。

フォーラムでは、音楽ジャーナリスト・竹村淳さんとラテン音楽愛好家・高橋研二さんが「キューバ音楽と日本人」と題して講演しました。その中で、両氏は、マンボ、チャチャチャ、ボレロ、ルンバなど、日本人を引きつけて止まないこれらの音楽が、いずれもキューバ音楽であることを明らかにし、これらの音楽がいつごろ日本に入ってきたのか、そして、日本人にどう迎えられ、愛好されてきたかを、さまざまなエピソードを交えて解明しました。

フォーラムの参加者は約50人でしたが、いずれもキューバ音楽の魅力に魅せられたようでした。

松尾光のキューバ右往左往④

1年と3か月、 4割の日程で思うこと

講座を始めて1年と3か月。3年プロジェクトの4割消化した。ゼロからよいめぐり合わせがかさなりよくここまで来たとの思いがあるが、3年のプロジェクト期限を考えると少し焦る気持ちがある。持続可能な日本語講座にするには3年は短いとわかった。

そして最近思うこと。ボランティアの甘えだ。サンクティ・スピリトゥス大学からは無報酬だが、実は国際交流基金からキューバ人の何倍もの報酬をもらっている。専用の教室や講師机も与えられている。つい教師の経験がないこといすぎて大変さを強調しすぎていた。メキシコの国際交流基金の専門家にも指摘されていた。一度教師を始めたら、ベテランのようにすべてわかっているようにふるまわなければならない。学習者もプロから教わっていると感じて初めてついてくる。これを肝に銘じた。

9月

青年の島

来年はキューバ日系移民 120 周年で 1200 人日系人の記念の年。



プレシディオ・モデロ刑務所

青年の島は革命指導者、日本人移民にとって大事な場所。刑務所、収容所の歴史だ。いまは観光スポットとなっているプレシディオ・モデロ刑務所がある。ラウル、フィデルカストロも収容された刑務所。第2次世界大戦ではアメリカの敵国、日本人、ドイツ人、イタリア人の収容所となった。この島でホセマルティも幽閉生活を送った。日系人のきびしい現実の歴史にふれる。

青年の島にはキューバ唯一の日系人社会がある。日本語講座の需要を聴取する目的で行った。結局日系人社会の高齢化と若者のアメリカやカナダ亡命が進んで縮小状況にあり、日本語講座の需要はあまりないということがわかった。少し寂しい気がする。

青年の島は革命指導者、日本人移民にとって大事な場所。刑務所、収容所の歴史だ。いまは

滞在はのんびりとした。日系3世の港さんとナンシー夫人の献身的なもてなしをうけた。日系の方たちはソ連崩壊前にスイカ栽培で生計を立てていた。海外で高く売れ裕福な生活ができたようだ。でも今は高収入を得る道はない。4世達がお金を求めアメリカへ行く理由だ。日系人は国外へ出やすいそうだ。



日系社会会長の宮沢さん(左)と筆者。息子さんは技術者でカナダへ



3世の港さんナンシー夫人娘さんは医者でアメリカへ

新学期前に巨大ハリケーンイルマが (Huracán Irma)

9月初め金曜日の夜から日曜日の朝にかけて長い豪雨と風が猛威を奮った。右の図で分かるようにキューバの北をかすめて上陸せずに通っていった。



イルマは900hp ぐらいの規模でフロリダへ

インフラがやられた。農作物の被害もあったようだ。真っ先に電気がとまる。3日間、エアコンなし、真っ暗闇で復

旧の見込みがわからないままストレスがたまる。交通機関もとまる。でも街はたいして混乱していない。ろうそくの灯での勉強は江戸時代の寺子屋のようだと思っていたら、そのうち電気が復旧した。

巨大ハリケーンイルマ後、日本語講座に嵐

10日遅れの新学期だった。予想以上の日本語講座希望者でのんびり生活が激変し、嵐が訪れる。

新入生が来なかったらと心配したのだが、ノミネートはなんと70名を超える。その中で特に熱心なのは15名ほど。結局11月現在で25名ぐらい。医学生、若い教師、テレビ局勤務の若い女性、高校生、大学生など多彩な顔ぶれだ。歌の指導も継続している。

90分講座は1回でも疲れるのに毎日2回やるとぐったりで9時過ぎには横になる。9月、10月は国際交流基金の3年目申請がせまり書類作成と重なり今までで最も忙しくなった。



新入生の一部 まだ増え続けている

9月から講座継続のための教師養成

講座継続のため、キューバ人の教員養成をやらなければならない。成績優秀者男女1名ずつ2名を選んで教師指導を始める。

国際交流基金へ日本で行う教師研修の申請もする。今年



2年生成績優秀者が1年生を教える

の採用は難しいかもしれないが、来年には採用されることを願っている。

結局キューバ国内の手続きが大変で申請は1件のみだった。

10月

キューバ円卓会議の方と合流

私がお世話になっているキューバ円卓会議の方のキューバ訪問旅行に合流させていただく。ゲバラの没後50年式典の参加やサンクティ・スピリトゥスでの学習者との交流だ。おそらく報告があるのでトピックのみ。

1. サンタクララでギジェルモ氏と再会

46年前の日本人さとうきび狩りのメンバー安藤さんの弟子の指導で40年間、居合剣道の修行している。40年、日本を思い続けているとても素晴らしいキューバ人だ。

2. ゲバラの没後50年の式典参加(10月8日)

ラウルカストロも参加。厳粛ななかに盛大に行われた。



↑子供たちによる日本語のうた。伴奏は筆者 ←成績優秀者 いただいた浴衣を着る。

円卓会議のツアーでなければ参加できない、よい経験をさせていただき感謝。後日談:実は日本人(純さん)が参加。個人旅行でも出席できたのだ。

3. サンクティ・スピリトゥス

民宿でペドラ副学部長の歓迎のスピーチ、学習者の日本の歌、日本語スピーチの練習を行った。とてもいい雰囲気だった。子供たちの歌の伴奏をし、ピアノを贈った。

続々と日本人がサンクティ・スピリトゥスに…

日本語講座に来ていただき日本語の交流をしたり、宿に学習者を集めイベントをしたりした。学習者たちに良い刺激になった。

まず小崎慎也さん。彼の職業は観光地(京都、湯布院)の若い人力車夫。初めて聞く仕事にちょっと戸惑ったが高収入だそうだ。たくましい若い日本人の話は参考になる。飛び込み



小崎慎也さん(右から2番目)。25歳、自由人。キューバを旅する若者は多いようだ。

みで企業を訪ねスポンサーになってもらい、帰れば人生感の講演などして稼いで楽しんでいる人がいるという。

日本語講座のスポンサーも、飛び込みで教育関係にかけあつて支援を頼んでみてはと勧められた。

次は日野純さん。キューバ革命家、とくにフィデル大好き人間。ラウルも大好き。年齢には見えない若々しい女性。



フィデル大好き人間、日野純さん(中央)



囲碁を楽しむキューバ人

チェの式典にラウルを見に来て、これで4回目だそう。革命家カミロシエンゴスの命日に合わせ花を添えにサンクティ・スピリトゥスへ1週間

滞在。チェを心から尊敬している講座責任者や学習者が歓迎した。

職業はマッサージ師。私の講座を5回以上見学していただき、よき理解者になってくれた。最後は国際囲碁交流の会の皆さん。西島さんに大変お世話になっている。囲碁の普及のためにキューバきている。私の講座学習者にアマ5段のサンティアゴさんがいる。サンティアゴさんは強い相手とできないので、力が落ちて日本人との対局は残念ながら惜敗だったよう。強い対局ソフトをいただき捲土重来を期すハバナで成績上位の人は、日本人に勝ったそうで、キューバの棋士は着実に実力をつけている。

11月

フィデルー周忌

昨年ハバナのセミナー参加の時知ったフィデルの死。11月25日22時。あっという間に1年がたった。外国人の私は行事の参加もままならないが、テレビの映像でフィデルをしのぶ。ハバナでの大集会が何回も放映。ラウルはサンティアゴ・デ・クーバだと聞く。街は大きな垂れ幕でしのんでいた。フィデルの存在感を改めて感じる。

講座風景

今度の新入生は社会人が続々継続を断念。そのかわり高校生が10名近く残る。講座はさながらマンガ好きの高校生が集まる授業風景に。何回言っても覚えないので、やる気があるのかないのかわからない。そしたら優秀な学習者が私の日本語を講座中スペイン語で補ってくれた。皆を一括する現役美術教師が現れた。2年生と違った熱気が漂っている。

でも驚くのは指導する1番の優等生は15歳の高校生。前述の高校生とは別次元で、見た感じ20代で教師のよう。マンガ「ワンピース」がファンという子供っぽさもみせるが、医学部生より理解が早い。どんな大人になるだろう。日本語教師になりたいといていた。

弁論大会の準備

ハバナ大学で日本国大使館、国際交流基金の支援で日本語弁論大会が行われる。今年は正規の手続きで、5名ぐら

い参加してくれればと思いきやなんと13名が手を挙げた。日本語の原稿が書ける学習者は3名ぐらい。あとはわたしが学習者のスペイン語原稿をネットで英語に訳しそれを見て日本語に直した。とても時間がかかり、多忙の最大原因になった。

訳していて、わかっていないと思った私の講座を理解していたり、無駄かなと思った歌や料理の効果が大きいことがわかったりして思わぬ発見があり少し感激する。

国際交流基金の日本語教育専門家の訪問

今年はサンクティ・スピリトゥスでもセミナーを。

去年の蟻末氏に続き国際交流基金の日本語教育専門家の松田さんが週末訪問する。今年はアシスタントに教え方をセミナーしていただく。ハバナ大学とは違いインフラが整わず悪戦苦闘の現実をどう見るか。松田さんが仕事をしておられるメキシコには1000人ほど日本語教師がおられる。メキシコからみればハバナ大ですら貧弱な日本語教育現場だろう。

12月2～7日 国際交流基金松田さん訪問。セミナー2回、9日弁論大会、13日大学行事でピアノ伴奏、そして日本語講座の試験、40人分の日本食づくり。12月は目白押しの日程だ。

実は11月初めから体調を崩し休み休みの毎日。何とか乗り切りたい。

まつお あきら

日本経済新聞社でIT技術者として30年近く勤務。2016年3月に退職後、仕事とは無縁なキューバ行きを決めた。その経緯は、今から25年前に父親の松尾威哉さんがハバナ大学に日本語講座を開設したことにさかのぼる。

詳細は本紙21号(2016・4・4発行)

11ページのBOOK『キューバの光と影 — ボランティア日本語教師三年の記録』参照。



キューバ友好円卓会議への入会・カンパ随時受付中♪

キューバ友好円卓会議は、「キューバとの友好推進」、「キューバに関する情報交換と情報発信」を目的に2003年に設立され、年1～2回、フォーラム、シンポジウム、講演会などを開催。そのほかハリケーン災害の支援活動、キューバツアーなども行っています。

事務局スタッフは全員ボランティアです。

会報『サルー!』の読者約600名

■年会費：3000円

どなたでも入会できます

お問い合わせはFAXかe-mailで下記へ

キューバ友好円卓会議 FAX 03-3415-9292

e-mail cuba.entaku.0803@gmail.com

郵便振替 00100-9-499950 キューバ友好円卓会議